

## 築 70 年の養蚕農家

この家を直すと言えば誰もが引くかなりのボロ家で、松代群発地震の震源地と言われる皆神山のふもとに建つ、かつては養蚕農家だった建物である。皆神山の山頂には神社があり神が祀られている。神無月と言われる 10 月、ここに多くの神々が集まるとこの地域では信じられている。神の信託を告げてくれる人が各家々の石や樹、柱などに守り神が宿っていることを知らせてくれた。この家でもそれまでは布団を干したり並んで腰かけて写真を撮ったりしていた大きな石が守り神であると知らされてからは、その石を皆神山の方角へ向けて立てて祀ってある。ヨメらしいことが何ひとつできない自分には、この地に住むなどということは恐らくないだろうと思っていたが、夫の発病を機にまるで神に導かれるかのように気が付けばこの家で暮らし始めていた。松代というところはこの近在では一目置かれた存在で、縁談の相手が松代と聞くや『オラッチの娘を不幸にする気か！』と即座に追い返したという話もあるほどだ。東北育ちの小民に遠く信州のこのような機微など知る由もなくまんまと松代のヨメになってしまったわけだ。反面、松代は真田十万石時代の遺構を秘めガラパゴスのように生き延び、それをまちづくりにつなげる NPO などの頑張りによって今や視察や観光客が大いに増え、若者の移住もあり魅力的な街に生まれ変わりつつある。



この家の守り神と言われる“家神さん”

この家は第 2 次大戦中の昭和 20 年に不慮の火災で焼失し同じ場所に祖父母が再建したと聞いている。松代は、官営の富岡製糸場で学んだ和田英（生家の横田家は長野市により改修の後公開されている）が民営としては初めての製糸場・六工社を創業した土地である。その後、ここから諏訪・岡谷などへ製糸業が広がっていったとのことである。夫の小さいころは御多分にもれず家の中でも蚕を飼っていたそうだが昭和 30 年代に主屋の一部を減築して隣に蚕室を建て養蚕の規模を拓けている。父は蚕のおかげで子どもを学校にやれたと語っていた。年齢と共に規模を縮小して父母による養蚕は平成 9 年、父 82 歳まで続いた。主屋の 2 階は今でもほぼ蚕を飼っていた時のままの状態である。

長期入院を終えて車椅子での帰宅となる夫を迎え入れるために、長年住み慣れた団地 3 階の住居をあきらめこの養蚕農家へ移った。父母は介護施設の入所が決まり、この家に誰もいないことが不思議な気がした。母のおしゃべりも父の怒鳴り声も聞こえない。静かになってみると、そこには戦死したおじさんがいた。父は戦後シベリアから帰還したが、航

空兵だった父の弟は戦死したという。仏壇横の地袋には少しの遺品が遺されていた。遺品を整理して収め直した。軍隊で勉強したのだろう数学や物理のような真新しいノートが何冊かあった。一番下に端が丸くなってよく使いこまれた温かそうなノートがあり最後のページには少し大きめの字でこう綴られていた。死刑に処せられる松陰の辞世の句、そのものだったのだろう。

『親思う心にまさる親心、きょうのおとずれ如何に聞くらん』

父には末に妹もいた。家の焼失と兄の戦死に加えて  
思いを寄せる人も戦争で亡くなったらしく精神を病み  
50代で病死している。おしゃれな人だったようで綺麗な小物が少し遺されている。静かになった家の中に実は先住民が居て、私の様子など全く関心なしと言わんばかりにこちらに背中を向けてびたりと近くに座っている。この日は先輩猫と共に戦死したおじと病死したお婆の墓参りをすることにした。庭に咲くピンクの秋明菊を供えてとうとうこの家の住人になるという報告をし、気持ちの区切りとした。

